E-6

沖縄語形容詞述語の形態論――そこに「ある」はあるのか？

玉元孝治（沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員）

【要旨】沖縄語の形容詞述語には、存在動詞の「ある」に相当する要素が何らかの形で含まれているという考え方が広く通用している。本発表では、今帰仁・名護・金武など沖縄島北部地域諸方言のデータを参照しつつ、存在動詞「ある」の存在（顕在）を前提としてきた先行研究の分析の問題点を指摘する。本発表が提案する「接語仮説」では、沖縄語の形容詞述語は、語として自立する形容詞語幹と、存在動詞の音韻縮約によって生じた接語から成り立っていると分析される。接語仮説は、先行研究が抱えるさまざまな問題をクリアし、北部諸方言を含めた沖縄語のデータを矛盾なく記述することに貢献する。また、接語仮説を踏まえると、沖縄語の形容詞は Dixon（2004）の類型でいう「非動詞的（non-verb-like）な形容詞」に分類され、音韻縮約により接語化する存在動詞は一種のコピュラと解釈される。この分析は、形容詞の類型（動詞的／非動詞的）と文法関係標示の類型（主要部標示／従属部標示）との相関を指摘した Dixon の一般化にも合致するものである。

1. はじめに

沖縄語の形容詞述語（首里方言の *magisan*「大きい」、*tu:san*「遠い」など）は、歴史的な成立過程としては、語幹に相当する部分と日本語の「ある」に相当する存在動詞が融合したものであるという考え方が Chamberlain（1985）以来広く受け入れられてきた（服部 1932［1959］、上村 1963、外間 1971、津波古 1986、名嘉真 1992 ほか）。しかし、形容詞述語を共時的に分析した場合に、この存在動詞がどのような形で実現しているのかという問題については、先行研究の見解は必ずしも一致していない。

沖縄語の形容詞述語を形態論的に分析し、存在動詞の関与を明示した先行研究は、二つの立場に分けられる。第一の立場は、形容詞述語の表層形式には存在動詞「ある」が補助動詞として実現していると分析する立場である（宮良 2000、吉本 2021 など）。以下では、この立場の分析を「補助動詞分析」と呼ぶ。補助動詞分析によると、形容詞述語 *magisatan*「大きかった」は、 (1)のように、語幹 *magis* と補助動詞 *atan* からなるということになる[1]。

(1)　*magis* + *atan*（形容詞語幹＋補助動詞）

第二の立場は、形容詞述語に含まれる存在動詞は、動詞語幹を派生する接辞として実現しているとする立場である（Shimoji 2012 など）。この立場の分析によると、*magisatan*「大きかった」は、 (2)のように、接辞-*sa*-によって動詞化された語幹 *magisa*-と屈折語尾-*tan* からなる。Shimoji（2012）はこの接辞-*sa*-を、形容詞語根を名詞化する接辞-*sa* と存在動詞 *ar*-に由来するものとしている。以下では、この分析を「動詞化接辞分析」と呼ぶ。

(2)　*magi-sa-tan*（語根-動詞化接辞-屈折語尾）

[1] 宮良（2000）は *magis* を「語根」としているが、ここでは吉本（2021）の分析に従い、「語幹」とした。

本発表では、今帰仁・名護・金武など沖縄島北部地域諸方言のデータを手掛かりとして、補助動詞分析と動詞化接辞分析はいずれも問題があることを示し、これらに代わる第三の分析として「接語仮説」を提案する。

2. 先行研究の問題点

2.1. 補助動詞分析の問題点

補助動詞分析を支持する根拠となってきたのは、首里方言の形容詞述語に存在動詞 *ar-*「ある」と同一の形式が含まれている（(3)の太字部分）という言語事実である。しかし、沖縄島北部地域には、形容詞述語に含まれる形式と存在動詞の語形が一致しない方言が複数存在することが指摘されている（新里 2006）。(3)の表の網掛け部分は、形容詞述語に含まれる形式と存在動詞の語形が一致しない箇所である。補助動詞分析は、これらの方言の語形を適切に扱うことができないという欠陥がある。

(3) 首里方言・今帰仁方言・名護方言・金武方言の比較[2]

	ある	大きい	あった	大きかった
首里方言	***an***	*magis**an***	***atan***	*magis**atan***
今帰仁方言	***an***	*magis**en***	***atan***	(*taka:s**e:tan***)
名護方言	***ain***	*magih**an***	***aitan***	*magih**atan***
金武方言	***an***	*magis**an***	***a:tan***	*magis**atan***

2.2. 動詞化接辞分析の問題点

次に、動詞化接辞分析の問題点を検討する。

動詞化接辞分析は、形容詞述語が動詞述語と同じ屈折パターンを示すという事実が根拠となっている。動詞化接辞分析が正しいならば、形容詞述語と動詞述語から屈折語尾を取り除いた部分（それぞれ「形容詞語幹」「動詞語幹」と呼ぶ）は、並行的なふるまいを示すはずである。しかし、実際には、形容詞語幹と動詞語幹はいくつかの点で異なるふるまいを示す。

形容詞語幹と動詞語幹の文法的な相違点として、①述語が焦点化されるときの形式、②述語が焦点化され、両肢述語化されたときに屈折を担う動詞の種類、③〈理由〉・〈感嘆〉を表す「ヌ語法」の可否、などが挙げられる。

以下では、形容詞語幹と 3 種の動詞語幹（存在動詞 *ar-*「ある」、語幹末が/ar/の動詞 *uwar-*「終わる」、語幹末が/a/の動詞 *wara-*「笑う」）との比較を行う。なお、以下で示す例は、断りのない限り全て金武方言のデータである。

2.2.1. 述語焦点化

動詞述語が焦点化を受けるとき、焦点助詞=*ru* は動詞語幹に直接付加することはできず、動詞は不定

[2] 首里方言のデータは『沖縄語辞典』（国立国語研究所 1963）、今帰仁方言のデータは『沖縄今帰仁方言辞典』（仲宗根 1983）、名護方言のデータは大西（2006）からの引用である。比較を容易にするため、表記を一部改めている。金武方言のデータは発表者のフィールド調査に基づいている（コンサルタントは 1947 年生まれで金武町並里区出身の男性 N.K 氏）。入手できた資料からは今帰仁方言の「大きかった」の語形が得られなかったため、表中では「高かった」で代用した。

形（infinitive form）という形式をとる必要がある。金武方言の動詞不定形は、存在動詞 *ar*-および語幹末が/ar/の動詞の場合は、(4a,b)のように語幹末の/r/が脱落して/a/が長音化し、語幹末が/a/の動詞の場合は、(4c)のように語幹末母音が/e/に変化する[3]。一方、形容詞述語が焦点を受けるとき、焦点助詞=*ru* は(4d)に示すように形容詞語幹に直接付加することができる。動詞述語の場合のように、何らかの形態的変化を被ることはない。

(4)　述語焦点化の形式（金武方言）

述語の種類	表層形式	擬似グロス
a. 存在動詞 *ar*-	*a:=ru*（*su:ru*）	「あり=FOC（する）」
b. 語幹末が/ar/の動詞	*uwa:=ru*（*su:ru*）	「終わり=FOC（する）」
c. 語幹末が/a/の動詞	*ware=ru*（*su:ru*）	「笑い=FOC（する）」
d. 形容詞	*magisa=ru*（*a:ru*）	「大きい=FOC（ある）」

さらに、動詞と形容詞では、述語が焦点化を受けるときに屈折を担う動詞の種類も異なっている。(4)にかっこ書きで示したように、動詞述語が焦点化を受けるときには軽動詞 *s*-「する」、形容詞述語が焦点を受けるときには補助動詞 *ar*-「ある」が屈折を担う。このことは、形容詞述語に含まれるとされる存在動詞「ある」が焦点ドメインの外側にあり、形容詞語幹が動詞語幹としては機能していないということを示唆する。

2.2.2.　ヌ語法

「ヌ語法」とは、形容詞語幹に助詞=*nu* が後接して、〈理由〉または〈感嘆〉を表す構文のことをいう。この助詞=*nu* は、動詞のいかなる形式にも後接することができない。ヌ語法は、形容詞語幹特有の語法であり、形容詞語幹と動詞語幹を同一視することができないことを示す根拠となる。

(5)　ヌ語法（金武方言）

述語の種類	表層形式	日本語対訳
a. 存在動詞 *ar*-	N/A	―
b. 語幹末が/ar/の動詞	N/A	―
c. 語幹末が/a/の動詞	N/A	―
d. 形容詞	*magisa=nu*	「大きくて／大きい！」

この点については、次のような反論がありうる。すなわち、ヌ語法において助詞=*nu* が付加しているのは形容詞語幹ではなく形容詞語根の名詞化形であり、したがって、ヌ語法の可否は動詞語幹と形容詞語幹の違いではなく、動詞語幹と名詞語幹の違いというべきであるという反論である。確かに首里方言では、形容詞語根の名詞化形（例：*magisa*「大きさ」）と形容詞語幹の形式が常に一致する。しかし、金武方言では、語根末が非高母音（/a/、/o/）の形容詞の場合、形容詞語根の名詞化形と形容詞語幹の形式

[3] これらの形式は、動詞語幹に不定接辞-*:*（語幹末が/ar/の場合）または-*i*（語幹末が/a/の場合）が後接して、さらに/r/削除（//uwar-:// → *uwa:*）、母音融合（//wara-i// → *ware*）の形態音韻規則が適用されたものと解釈することができる。金武方言の動詞形態論の概要については、Tamamoto（in press）を参照されたい。

が形式的に区別される。(6a-c)の観察から、形容詞のヌ語法で助詞=*nu* が付加するのは、形容詞述語で用いられるものと同じ形式、すなわち形容詞語幹と同定することができる。

(6) 名詞化形と形容詞語幹の比較（金武方言）

a. 名詞化形：*takasa*「高さ」、*nbosa*「重さ」

b. 述語形：***takaːn***「高い」、***nboːn***「重い」

c. ヌ語法：***takaː***=*nu*「高くて／高い！」、***nboː***=*nu*「重くて／重い！」

3. 本発表の提案

3.1. 形容詞語幹の自立性

本題に入る前に、形容詞語幹の自立性について確認しておきたい。動詞語幹は屈折語尾を伴わない限り語として自立しない拘束形式であるのに対し、形容詞語幹は焦点助詞=*ru* や「ヌ語法」の=*nu* などの助詞（接語）が直接付加することができることから、形態論的に自立した文法語（grammatical word: cf. Dixon and Aikhenvald 2002）と認められる。

「語」であるならば、品詞分類の対象となる。ここではまず、形容詞述語の屈折語尾を含まない語幹部分（*magisa*、*takaː*、*nboː*）こそが「形容詞」として同定すべき語であると認定する。

3.2. 存在動詞の接語化

次に、形容詞語幹と屈折語尾がどのような形で結合しているのかという問題について考える。

金武方言の非過去テンス接辞には、語幹末の音素に応じて選択される 4 つの異形態（*-ju-*、*-i-*、*-ː-*、*-Ø-*）がある。語幹末が/a/の場合、非過去テンス接辞は*-i-*が選択され、母音融合規則（//a-i// → e）により語幹末の母音/a/が/e/に変化する（例：//wara-i-n// → *waren*「笑う」。Tamamoto in press）。形容詞述語の屈折語尾が接辞として形容詞語幹に結合しているとするならば、形容詞述語の非過去形式は//magisa-i-n// → **magisen* となるはずであるが、実際の語形は *magisan* であり、非過去テンス接辞は*-Ø-*として実現している。ゼロ形態の非過去テンス接辞*-Ø-*が選択されるのは、語幹がコピュラまたは存在動詞の場合である。このことから、形容詞語幹と屈折語尾の間には非顕在的な存在動詞が介在しており、ゼロ形態の非過去テンス接辞*-Ø-*は、形容詞語幹自体ではなくこの存在動詞によって選択されたものと考えられる。

本発表の提案は、形容詞述語において接語として現れる屈折語尾は、基底構造で存在していた存在動詞の音韻縮約（phonological reduction）によって生じる‘simple clitic’（*She's gone* の*'s* の類。cf. Zwicky

(7) 存在動詞と形容詞述語の屈折形式の比較（金武方言）

屈折カテゴリ	存在動詞	形容詞述語
非過去・直説法	*an* (//ar-**Ø-n**//)	*magisa=n* (//magisa [ar]-**Ø-n**//)
非過去・理由節標示	*aːkutu* (//ar-**Ø-kutu**//)	*magisa=kutu* (//magisa [ar]-**Ø-kutu**//)
丁寧・非過去・直説法	*aːbin* (//ar-ː**bi-Ø-n**//)	*magisa=ːbin* (//magisa [ar]-ː**bi-Ø-n**//)
過去・直説法	*aːtan* (//ar-**ta-n**//)	*magisa=tan* (//magisa [ar]-**ta-n**//)
不定形[4]	*aː* (//ar-ː//) +*gisan*	*magisa=ː* (//magisa [ar]-ː//) +*gisan*

[4] 不定形は、〈様態〉を表すモーダル補助形容詞述語 *gisan*「～そうだ」に接続する形式を語例とした。

1977; Zwicky and Pullum 1983）として分析すべきである、というものである（以下、この分析を「接語仮説」という）。金武方言の存在動詞の語形と形容詞述語の形式を比較すると、形容詞述語の屈折部分は、存在動詞から語幹を取り除いた部分と一致することがわかる（(7)の表中、かっこ内の//　//は形態音韻表示＝基底構造である）。

形容詞述語の屈折部分は、存在動詞語幹をゼロ形態化する形態音韻規則(8)によって派生するものとして記述することができる。この形態音韻規則の適用条件は、「形容詞語幹の直後に存在動詞が隣接している場合」と記述することができる。

(8)　存在動詞語幹 → Ø／形容詞語幹#___

形容詞語幹に焦点助詞=*ru* が付加するときの両肢述語形式(9)は、形容詞語幹と存在動詞語幹の線条的隣接性という適用条件を満たさないために、形態音韻規則(8)が適用されず、存在動詞語幹が顕在化したものとして説明することができる。

(9)　*magisa=ru a:ru*（＝(4d)）
「大きい=FOC　ある」

沖縄語の中には、渡名喜島方言 *takasa ʔataɴ*（津波古 1986: 2）や伊江島川平方言 *takasa ʔaɴ*（名嘉真 1992: 570）などのように、形容詞語幹と存在動詞が「融合していない」形式の形容詞述語を有する方言がある。これらの方言には(8)の形態音韻規則が存在しておらず、形容詞語幹と存在動詞からなる形容詞述語の基底形式が、そのまま表層形式として実現したものと説明することができる。

3.3.　接語仮説によって克服される先行研究の問題点

接語仮説は、さきに挙げた補助動詞分析や動詞化接辞分析が抱える問題点を全てクリアすることができる。たとえば、今帰仁・名護・金武などの方言では、形容詞述語に含まれる形式が、存在動詞「ある」の活用形と必ずしも一致しないという問題があった。接語仮説によれば、今帰仁方言の *magisen*「大きい」、名護方言の *magihan*「大きい」、金武方言の *magisatan*「大きかった」は、それぞれ *magise=n*／*magiha=n*／*magisa=tan* と分析されるのであるから、形容詞語幹の形式（今帰仁 *magise*／名護 *magiha*／金武 *magisa*）を、存在動詞の形式（今帰仁 *an*／名護 *ain*／金武 *a:tan*）に直接紐づけて考える必要はなくなる。形容詞述語に含まれる形式と存在動詞の活用形が一致する必然性はないのである。

述語焦点化やヌ語法の可否における動詞と形容詞のふるまいの違いについても、明快な説明が可能となる。接語仮説によれば、形容詞語幹自体には存在動詞「ある」に由来する要素は含まれていないのであるから、形態パターンが動詞語幹と同じでなくても何ら問題とはならない。接語仮説によれば、形容詞と動詞は「屈折するかどうか」「語幹のみで自立しうるかどうか」という点において正反対の性質をもつ語類なのであり、両者の形態パターンが異なるのはむしろ当然のことといえる。

4.　沖縄語形容詞の類型論

最後に、接語仮説を踏まえた沖縄語形容詞の類型論的な位置づけについて考えたい。

Dixon（2004）は、「動詞的（verb-like）／非動詞的（non-verb-like）」、「名詞的（noun-like）／非名詞的

（non-noun-like）」という二つのパラメターに基づき、形容詞の 4 類型を提案している。ここでは特に、「動詞的／非動詞的」というパラメターに注目する。

「動詞的」な形容詞とは、動詞と同様の形態論的プロセスを経て、単項述語（intransitive predicate）として機能するタイプの形容詞である。これと対立する「非動詞的」な形容詞は、コピュラ補部に生じるタイプの形容詞である。

接語仮説によれば、沖縄語の形容詞は屈折せず、存在動詞の音韻縮約によって生じる接語を伴って述語として機能するのであった。動詞とは異なる形態論的プロセスを経るため、「動詞的」とはいえない。むしろ、存在動詞の音韻縮約によって生じる接語を形容詞専用の特殊なコピュラと捉え、形容詞語幹をコピュラ補部に生じる「非動詞的」な形容詞と分類するほうがより適切であると考える。

沖縄語の名詞述語文で用いられるコピュラは、存在動詞とは別の形式をもつ（首里方言 *jan*、金武方言 *jen*）。しかし、「コピュラ」が指し示す範囲を名詞述語文のそれに限定するのではなく、コピュラの定義を「屈折しない語が述語として機能するときに、文を成立させるために必要とされる‘dummy verb’」とするならば（cf. Lyons 1968: 322; Givón 2001: 120）、形容詞述語の表層形式でゼロ形態化する存在動詞も実質的な意味内容をもたない‘dummy verb’であり、一種のコピュラとみなすことができる。

沖縄語の形容詞を「非動詞的」と位置付けることは、形容詞の類型と文法関係標示の類型との相関関係に関する Dixon の一般化にも合致するという点で重要である。

(10) Dixon の一般化（2004: 33）
非動詞的な形容詞は、従属部標示型の言語で見られる傾向がある。
動詞的な形容詞は、主要部標示型の言語または主要部標示型でも従属部標示型でもない言語で見られる傾向がある。

従属部標示型（dependent-marking）とは、主語・目的語・所有者などの文法関係（grammatical relation）に関わる形態的標識が、従属部（節における項）に標示される言語のことをいう。文法関係が主要部（節における述語）に標示される主要部標示型（head-marking）の言語に対置される（Nichols 1986）。

沖縄語は、名詞句に付加する格助詞によって文法関係が標示されるため、従属部標示型の言語に分類される。動詞化接辞分析を採るならば、沖縄語の形容詞は、動詞と同様の形態プロセスを経て、節の中で単項述語として機能する「動詞的」な形容詞ということになる。沖縄語が従属部標示型の言語でありながらその形容詞が「動詞的」だとするならば、沖縄語の形容詞は類型論的に例外的な存在ということになり、なぜそうであるのかという新たな問題が生じることとなる。しかし、接語仮説によれば、沖縄語の形容詞は「非動詞的」と分類され、その理由は、言語類型論における一般性の高い傾向から説明されるのである。

5. おわりに

本発表では、補助動詞分析と動詞化接辞分析の問題点を指摘し、第三の分析として、形容詞述語は形容詞語幹に存在動詞「ある」の音韻縮約によって生じる接語が付加した構造をもつとする「接語仮説」を提案した。接語仮説に基づく分析は、今帰仁・名護・金武など沖縄島北部地域諸方言の形容詞を適切に記述することができることを確認した。また、沖縄語の形容詞を非動詞的なタイプと分類し、存在動詞およびその縮約の結果生じる接語を一種のコピュラとみなせることを論じた。

最後に、本発表の副題（そこに「ある」はあるのか？）に対する答えを改めて提示し、発表を締めくくる。

(11) 形容詞述語の表層形式には、存在動詞「ある」の本体（＝語幹）は存在しない。
ただし、存在動詞の音韻縮約の残滓である屈折語尾が、接語として形容詞語幹に付加している。

参考文献

上村幸雄（1963）「首里方言の文法」国立国語研究所編『沖縄語辞典』所収，pp.58-86，大蔵省印刷局

大西正幸（2006）「名護地区の方言」名護市史編さん委員会・名護市史『言語』編専門部会編『名護市史本編・10　言語』所収，pp.134-145，名護市役所

国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

新里幸昭（2006）「山原方言の形容詞」名護市史編さん委員会・名護市史『言語』編専門部会編『名護市史本編・10　言語』所収，pp.102-110，名護市役所

玉元孝治（2020）「沖縄北部・金武方言の動詞形態論」『琉球の方言』44，pp.35-67.

津波古敏子（1986）「沖縄中南部方言における形容詞形態論の輪郭（上）」『沖縄大学紀要』5，pp.1-39.

仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店

名嘉真三成（1992）『琉球方言の古層』第一書房

服部四郎（1932［1959］）「「琉球語」と「国語」との音韻法則」『日本語の系統』所収，pp.296-361，岩波書店

外間守善（1971）「沖縄方言形容詞の史的変遷」『沖縄の言語史』所収，pp.101-128，法政大学出版局

宮良信詳（2000）『うちなーぐち講座：首里ことばのしくみ』沖縄タイムス社

吉本靖（2021）「沖縄語の形容詞の形態統語構造：分散形態論の観点から」『琉球大学欧米文化論集』65，pp.25-41.

Chamberlain, Basil Hall (1895) *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language*. Asiatic Society of Japan.

Dixon, R.M.W. (2004) Adjective classes in typological perspective. In R.M.W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Adjective Classes*, 1-49, Cambridge: Cambridge University Press.

Dixon, R.M.W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) Word: a typological framework. In R.M.W. Dixon and Alexandra Aikhenvald (eds.) *Word: a cross-linguistic typology*, 1-41, Cambridge: Cambridge University Press.

Givón, Talmy (2001) *Syntax: an introduction, Volume I*. Amsterdam: John Benjamins.

Lyons, John (1968) *Introduction to theoretical linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Nichols, Johanna (1986) Head-marking and dependent-marking grammar, *Language* 62:1, 56-119.

Shimoji, Michinori (2012) Northern Ryukyuan. In Nicolas Tranter (ed.) *The Languages of Japan and Korean*, 351-380, London: Routledge.

Tamamoto, Koji (in press) Kin (Okinawa, Northern Ryukyuan). In Michinori Shimoji (ed.) *An introduction to the Japonic languages: grammatical sketches of Japanese dialects and Ryukyuan languages*. Leiden: Brill.

Zwicky, Arnold M. (1977) *On clitics*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.

Zwicky, Arnold M. and Geoffrey K. Pullum (1983) Cliticization vs. inflection: English *n't*, *Language* 59:3, 502-513.